

## 精神構造の規定因としての「自然」

塹江 清志, 水野 和夫\*, 塹江 光子\*\*

システムマネジメント工学科

(1999年9月1日受理)

### “Nature” as the Determinant of the Mental Structure

Kiyoshi HORIE, Kazuo MIZUNO\* and Mitsuko HORIE\*\*

Department of Systems Management and Engineering

(Received September 1, 1999)

This paper demonstrates the following items.

1. The concept of the “radical psychological traits” (Horie, 1998) is the same as the concept of the psychological traits of the “national mental structure” (Kimura, 1972)
2. The concept of the “national psychological traits” (Kimura, 1972) is the same as the concept of the psychological traits of the “national unconsciousness” (Jung, 1967).
3. The “national psychological traits” historically have been formed by the natural environment in which the nation has lived through the mechanism of “conditioning”.

### 要 旨

本論文では以下のことが明らかにされた。

1. 塹江 (1998) の「根源的心理特性」が、木村 (1972) の「民族的精神構造」と同じ心理特性である。
2. 木村 (1972) の「民族的精神構造」と Jung (1967) の「民族的無意識」とは同じ心理特性である。
3. 「民族的精神構造」は、「条件づけ」の機制で、その民族の置かれた自然環境によって歴史的に形成されてきたものである。

### 1 本論文の目的

塹江ら<sup>1)</sup>は、日本人の「根源的心理特性」が「一体感」の心理であり、西欧人の「それ」が「断絶感」の心理であることを指摘した。このことをふまえて本論文は以下のことを目的とする。

- (1) 「根源的心理特性」が、木村<sup>2)</sup>の「民族的精神構造」の1つであることを指摘すること。
- (2) 「民族的精神構造」が、Jung (河合<sup>3)</sup>) の「民族的無意識」に相当するものであることを明らかにすること。
- (3) 木村<sup>2)</sup>は、「民族的精神構造」が民族の生活環境

を構成する自然環境によって生成されるとしている。自然環境が人間の精神構造を形成する機制について明らかにすること。

### 2 「民族的精神構造」と「根源的心理特性」

#### 2.1 「民族的精神構造」

##### ① 「民族的精神構造」

木村<sup>2)</sup>は「この地球上に人類が発生して以来、人間は地球上の様々な土地に住み着いて、無数の共同生活集団を形成し、それらが離合集散を繰り返しながら、比較的大きな単位の共同体を組織し、それがそれぞれに固有の歴史をたどって、今日の諸民族、諸国家を形作って来た。その間にそれらの諸民族は、単に体型や皮膚の色などの外的身体的特徴においてだけではなく、ものの見方、ものの考え方などの心理的特徴においても、それぞれに異なった道をたどって、いわゆる民族的精神構造の多様性が生まれてきた。」

このことから、「民族的精神構造」とは「各民族の固有の、あるいは、特徴的なものの見方、ものの考え方などの心理的特徴」ということになる。

##### ② 「民族的精神構造」の始源性

木村<sup>2)</sup>は、この「民族的精神構造」が土台になって、それぞれの民族に特有な社会構造が、さらにはいわゆる文化が生み出されると述べている。そして、この特有な

\*愛知技術短期大学, \*\*岐阜教育大学

社会構造、文化構造は、もちろん、それがいったん生み出されると、その中に生活する各個人の、ひいてはその社会、その文化を構成している集団全体の思考様式、生活様式に強力な規制力を及ぼすと云っている。しかし、あくまでも、「民族的精神構造」が、社会構造、文化構造を作ったのであってその逆ではないと強調している。そして、この「民族的精神構造」を形成したのは、その民族の「生活様式」であるとしている。

## 2.2 「民族的精神構造」と「根源的心理特性」

### ① 日本人の「根源的」民族的精神構造としての「一体感」の心理

塹江<sup>1)</sup>は、「根源的心理特性」という言葉を諸々の心理特性がそこから派生、導出される、いわば源泉となるような心理特性を指すものとして用いている。そして、日本人（日本民族）に特徴的、あるいは、固有の心理特性（ということは、前述の木村<sup>2)</sup>の「民族的精神構造」ということになる。）の根底にあってそれらを生成せしめる「根源的心理特性」として「一体感」の心理を指摘している。

したがって、「一体感」の心理から日本人の「民族的精神構造」が生成されることになるから、「一体感」の心理は、いわば「根源的」民族的精神構造とでもよぶべきものとなる。

### ② 西欧人の「根源的」民族的精神構造としての「断絶感」の心理

塹江<sup>1)</sup>は、西欧人については、彼等の「根源的心理特性」として「断絶感」の心理を指摘している。上述の論理で、「断絶感」の心理は、西欧人（民族的にはゲルマン民族）の「根源的」民族的精神構造とでもよぶべきものとなる。

## 3 「民族的精神構造」と「民族的無意識」

### ① 「民族的無意識」

Jung（河合<sup>3)</sup>）は、無意識には「個人的無意識」、「民族的無意識」、「普遍的（集会的）無意識」の三種があるとし、「民族的無意識」とは、各民族に固有の、あるいは、特徴的な「心理特性」であるが、その表出（による現象）に対して当該の民族は「無自覚・無意識」であるような「心理特性」であるとしている。

### ② 「民族的無意識」としての「民族的精神構造」

前述の「民族的無意識」の定義からすれば、「それ」は「各民族に固有の、あるいは、特徴的な「心理特性」ということであるから、木村<sup>2)</sup>の「民族的精神構造」の定義と一致する。したがって、「民族的無意識」と「民族的精神構造」とは同義であると解することができる。

民族に固有な心理特性がもし当該民族に「意識・自覚」されているものならば、「意識」は時代、状況によって変化するものであるから、世界は近代以来「欧米化」の方向に変化しているから、少なくとも、そして、とくに日本人（日本民族）の「民族的精神構造」は現在では消失しているはずである。しかるに、「それ」が現存していることは周知のところである。したがって、「民族的精神構造」は、当該民族には「無意識・無自覚」のもの、すなわち、「民族的無意識」である。

### ③ 「甘え」の心理

土居<sup>4)</sup>による日本人に特徴的な「心理特性」としての「甘え」の心理は、「民族的精神構造」であるが、その表出に対して殆んど日本人は「無意識・無自覚」である。例えば、「天皇制」は「甘え」の心理の発露であるという（土居<sup>4)</sup>）。著者は、「日本国憲法」も「甘え」の心理の産物だと考えている。（こんな素晴らしい憲法は他国にも輸出すべきだと主張する日本人もいると聞かす、ここまでくると馬鹿としか云いようがない。）現実認識を欠如させて憲法を作るから、現実に立脚するとき「自衛隊」が必要になる。憲法と矛盾するから今度は「解釈学」が必要となる。ただ1つだけ断言できることは人間の生は現実認識の上でこそ可能であるということである。現実認識を欠如させた人間を「狂人」と云う。

### ④ 「民族的精神構造」の強靱性

世界的、そして、歴史的にみて辺境不毛の僻地であった西欧地域に西欧世界（社会）が本格的に成立したのは12世紀においてであった。したがって、当時の西欧は後進地域であり現在の言葉で云えば、開発途上地域であった。以来、「飢え」と「寒さ」に苦しめられ歴史的に長い間「貧困」に苦しんだ西欧世界は生活の糧を海外からの略奪に求めて海外進出を開始した。

コロンブス（1492）、バスコ・ダ・ガマ（1497）、マゼラン（1519）にはじまる海外侵略によって西欧諸国は世界の植民地化を遂行した。現在流行の言葉を使って美しく表現すれば、西欧世界による西欧世界のための「国際化・地球化」が開始された。彼等が植民地に求めたものは金、食糧、胡椒という生活物質であり、そして、奴隷（奴隷については理由は不明であるが諸家の指摘するところではない。）であった。したがって、彼等にとって、世界は資源略奪地であった。しかし、その後の産業革命によって、植民地は「市場」の役割をも強要されるようになった。実質的にはこの状態が今日まで持続していることは周知のところである。

世界の植民地化によって略奪されたものは「物（生活物資）」だけではなく、「心（精神）」でもある。すなわち、社会構造、文化構造、そして、精神構造をも破壊され、そして、彼等のものを強要されたのである（西欧の

世界化、西欧の普遍化)。日本の場合、幕末から明治の時期にかけて、欧米列強による植民地化を回避するために欧米への「同一化」を目指して文明開化政策の下に「欧米化」を積極的に推進した。文部大臣(森有礼)は、国語を日本語から英語に置換することを考えたのである。(そして、太平洋戦争中の文教政策は「適性国語」廃止であった。対英米戦に「英語」は不要なのである。これが日本人の「民族的精神構造」のなせることなのであるが、自らを研究者と称することの好きな人達はこんなことには関心をもたない。)1つの民族の国語こそ最もその民族の精神構造を象徴するものである。日本人は国語を放棄して、心身共に「欧米人」になろうとした。

しかし、前述のように日本人の民族的精神構造は存続している。ここにその強靱性をみる。

数百年にわたる西欧による「地球化」の結果、世界の諸民族が精神構造においても「西欧化」(換言すれば、「普遍化」,「世界化」,「国際化」)されてきたことは事実である。でなければ、西欧的精神構造の所産である西欧的「社会」,「文化」,「文明」を輸入・移入し近代生活を営むことができない。現在、世界中で西欧的近代生活が営まれていることは事実である。

しかし、前述のように民族的精神構造の強靱性は欧米の精神的所産の輸入・移入物に「日本的」という形容詞を付けさせるのである。「日本の民主主義」,「日本の共産主義」などである。もちろん、日本人自身このことに無自覚である。精神構造の変革はあくまでも意識次元のものであり、無意識の次元にある「民族的精神構造」は不変なのである。

## 4 「民族的精神構造」の生成因としての自然環境

### 4.1 「風土」としての「自然」

木村<sup>2)</sup>は、前述のように民族の「生活様式」が「民族的精神構造」を形成したとしている。そして、彼は風土論的立場に立脚して、民族の置かれた自然環境が生活環境となり、「風土」を介してその民族の「生活様式」を規定すると述べている。したがって、彼によれば、始源的には自然が人間(民族)の精神構造を形成することになる。

### 4.2 「風土」とは

彼によれば、「風土」とは、かつて、人間の生活環境の質量共に圧倒的大部分を構成した自然環境そのものではなく、自然と人間との「出会い」の場であると云う。その出会いの場において人間は、「自己認識」をせざるをえない。そして、その結果、自己析出せざるをえ

ない。それゆえ、「風土」とは、人間にとって「自己認識」の場であり、「自己析出」の場であると云う。

人間が置かれた自然環境を構成する全ての要素が実質的に同じ重み(意味)をもって人間の生に影響するわけではない(人間の生を根源的に支配・規制するのは「水」(食糧の象徴的表現)と「安全」であるから、これらに関わる要素が最重要である。「景色」の美しさよりも「食の豊かさ」の方が大事である。「花より団子」)。したがって、自然と人間とが出会う場において重要な意味をもつのは人間の生に重要な影響を及ぼす要素である。したがって、それらの要素を焦点にして自然を認識せざるをえない。「風土」が、人間の生活様式を規定するものならば、「風土」とは、人間の生に重要な影響を及ぼす要素を焦点にして認識された「自然」と解釈できる。

### 4.3 「自己」と「自然」との「出会いの構造」

「出会いの構造」は、「出会い」に先行して「認識」が存在するわけではない。「出会い」によって「認識」が成立するのである。「出会い」とは、自然環境の中で人間の「生活様式」による「生の体験」であり、これを介して人間の自己存在に関する「認識」が成立し、この自己存在に関する認識が精神構造(心理特性)の中核、基底として刻印されるのである。

### 4.4 「自己認識・自己析出」の過程

#### ① 「自己」認識・析出の根原因としての「挫折・拒否」体験

人間は、自己の「生」の流れが何等かの障害物によって阻まれる(挫折させられる、拒否される)ときにはじめて自己の存在を認識する。

その過程は以下のようなものである。

#### ② 「他者」認識の先行性

挫折によって最初に認識されるのは「障害物」の存在についてであり、「それ」が「自己ならざるもの」の存在として認識されるのである。ここで、それとの間に「断絶」が認識され、「断絶感」が生じ、その「対象化」が生起する。そして、対象化に伴ってそのより詳細なる「観察」が行われ、それに対して「命名(naming)」がなされる。

自然環境の中で人間(民族、人類)が生を挫折を体験するとき、自然との間に(に対して)人間(民族、人類)は「断絶感」を意識・認識・自覚する。挫折体験をもたないときは、原初的に存在した「一体感」が破壊されずに維持される。

自然の対象化に伴う「命名」が「自然(nature)」という言葉の発生である。木村<sup>2)</sup>は、日本では、自然全体を構成する個々の具体的自然物(「山」,「川」,「谷」な

ど)に対する「言葉」は存在するが、自然全体を指す「自然」という「ヤマト言葉」は存在せず、「自然」という語は支那語からの借りものであるという。とすれば、日本人は自然をトータルに対象化するような生活体験(挫折体験)を歴史的にもたなかったことになる。

### ③ 「自己認識」の機制としての「逆照射」

人間と自然との出会い場、すなわち、風土において、人間が「自己」を「自己」として認識するのは「自然の在り方」の認識の後に、「それ」との関わり中で、云わば、「それ」によって一方的に「規定」される形で、相手の側から逆に照射(「逆照射」)される形で(当世風に言えば、“light up”される形で)、自己に付与された分(自己の取り分、自己の分け前)を「自己のもの(自己)」として認識するのである。最初に「自己認識」が成立し、しかる後に、自己の側からの「照射」によって、「自己ならざるもの(の在り方)」の認識がなされるのでは決してない。

## 4.5 個体発生における「自我意識」形成の過程について

### ① 「躰」の意義

前述した風土における人間の自己認識の過程と個々の人間が出生後「自我意識」を形成する過程とは全く同じなのである。個々人においては、「自然」が「母」に置換されるだけである。

個人がこの世に出生以来3才頃に「自我意識」が形成されることは周知のところである。「自我意識」形成の根源因は、「母子関係」における「躰」を介しての幼児(の生)の「挫折体験」なのである。人間の幼児の場合、3才頃にいわゆる「躰」が開始される。

「躰」が開始される以前は、幼児は諸々の欲求、そして、それを充足するための諸々の行動・行為が、換言すれば、「甘え」が受容、許容されていたのが、「躰」という枠の下に禁止、制限、阻止される。したがって、「躰」とは、幼児によっては欲求阻止であり、「生(の流れ)」の挫折である。

### ② 「他者」としての「母」の出現

したがって、幼児は、母子関係におけるこの「挫折体験」を通じて「母」との間に「断絶感」を体験し、「母」を「他者」として認識する。母子間の「身体的一体」が、出生によって消失するが、母子双方において出生後も「心理的一体(同一視)」は存続する。そして、この「躰」を契機として「一体感」が「断絶」し(その後は、「一体感信仰」の心理、「一体感願望」の心理、「一体感幻想」の心理として終生存続する。),「母」を「対象化」し、「他者」としての「母」の認識が成立する。

### ③ 「自我意識」の成立

次に、母子関係における「母」の側からの幼児への働きかけ方、在り方に一方的に規定されて、幼児は自己(の在り方)を取り出し、「自我意識(自我像)」を形成する。ここでの母の機能を「鏡映機能」と呼んでいる。つまり、幼児の自我像形成における母の機能は、いわば母が「鏡」となって幼児(の在り方)(自画像)を写し出しているような機能であるからである。

## 5 自然環境による精神構造(心理特性)形成の機制

木村<sup>2)</sup>は、風土論の立場から、自然環境が風土を介して人間(民族)の生活様式(「生」の様式)を規定することによって「民族的精神構造」を形成すると述べている。すなわち、「自然」→「風土」→「生活様式(「生」の様式)」→「民族的精神構造」という一連の過程を示唆している。問題は、「生活様式」が如何なる「機制(mechanism)」で「民族的精神構造」を形成するかである。このことをここで検討する。

### 5.1 人間の精神構造の規定要因としての自然

#### ① 人類の発生

宇宙の生成(150-200億年前)→原始地球の生成(46億年前)→海の生成→生物の生成(40億年前)→酸素の生成(35億年前)→陸上植物の出現(4億年前)→森林の生成(3.5億年前)→動物の出現 という気が遠くなるような長い時間的経過の結果、最後に人類がこの地球上に発生したのである。

ホミノイド(2,000万年前誕生)→ラマモルフス→アウストラロピテクス・アファレンス(400万年前誕生、現代の人類の原点、「猿人」)→アウストラロピテクス・ボイゾイ→ホモ・ハピリス(「巧人」)→原人(ホモ・エレクトウス, 100万年前)→旧人(ホモ・サピエンス・ネアンデルターレシス, 25万年前)という進化の過程の結果として最後に現代人の祖先である「新人」(ホモ・サピエンス・サピエンス, 10万年前, クロマニヨン人)が発生した。

#### ② 自然への「寄生」

前述のことからも明らかなように、宇宙の歴史的経過の所産としてこの地球上に人類が発生したのである。つまり、宇宙、地球、自然の在り方が人類(の在り方)をはぐくんだのであり、決して「創世記」にあるようではないのだ。神話における「最初に神ありき」のように「最初に人類ありき」ではない。とにかく、物理的・外的環境世界の在り方の結果として(決して、神や人類自身の意志、意図によってではなく)、この地球上に析出

された人類が地球上の様々な地域で生を営み今日まで存続してきた。人類の「生」の歴史は、地球上でのそれぞれの場にしがみついたのあたかも寄生虫のような「寄生」の歴史だったのである。

現在でこそ科学技術とやらの手段で部分的に多少なりとも地球、自然を制御できるようになったが、それまでは(19世紀まで)は、全智全能ではなく、無智無能な人類は、その非力さ故に、環境世界に支配、規制されて、その慈悲心にすがって生きてきたのである。環境世界の慈悲心を要請する手段として人類は「神」を創造した(普遍宗教(キリスト教, イスラム教)の成立)ことが「寄生」の証左である。19世紀は「神への信仰」に生き、20世紀は「科学信仰」に生きてきたと云われるが、このことは少なくとも19世紀までの人類の「生」が環境世界への「寄生」であったことを意味する。

### ③ 人間の精神構造の規定要因としての自然

前述したような自然環境に寄生しての人間の(生の)在り方は、必然的に、寄生したその自然環境(の在り方)が、人間の精神の在り方(「精神構造」)をも規定することを意味する。したがって、人間の精神構造(心理特性)は、人類の始源においては、彼が寄生したその自然環境の(在り方の)所産なのであり、その自然環境(の在り方)とは独立して、あるいは、無関係に形成される、あるいは、生得的に保有していたのではない。(このことは非常に重要な意味をもつ。「始めに「精神」ありき」ではない。人間の個体発育に関しても同じことが云える。人間の精神の個体差を問題にする限り、それは、始源的には、彼の生育環境(遺伝的環境をも含めて)に一方向的に規定されるのであって、彼の意図的選択の結果として形成されるものではない。このことに対する理解を欠如しての人間現象に関する議論は空論である。しかし、現実には、我々はこの空論に莫大な時間、エネルギーを浪費している。)

## 5.2 太古の人間の精神構造

### ① 太古の人間の精神構造

前述のように人類は、この地球上に発生して以来自然に寄生してきたわけであるが、時代を遡れば遡るほどその寄生の度合は大であったと云える。その寄生によって「精神構造(心理特性)」が生成される。Jung(湯浅<sup>5)</sup>)は、そのような「精神構造」を「太古の人間の精神構造」と称している。

そして、それは「自然への畏怖の念(心理)」と人間の矮小さに対する自己卑下の心理を反映した「世界(自然)観」によって特色づけられると云う。これこそ、無智無能なるが故に自然環境に対して非力であり、それゆえに専ら自然に寄生している状況からの心理が投影され

たものと云える。

### ② Jungの「未開人の心理分析」

Jung(湯浅<sup>5)</sup>)は、アフリカで原住民と生活を共にし、彼等の精神構造(心理特性)を観察し、「未開人の心理分析」として、彼等は以下の心理を特徴としていると云う。

- (1) アニミズムの心理に支配、規制された「幼児的」な心理特性
- (2) 「投影(projection)」の心理
- (3) 自然界の中での存在価値の序列における人間の位置の低さ  
最上位に位置するのは太陽など、次に位置するのは山など、最下位に動物が位置し、動物の中での順位は、象、ライオン、大蛇、鱶の順に下位になり、人間は鱶の次に位置する。

20世紀においても、アフリカの原住民の精神構造は、「太古の人間の精神構造」と同じであることが分かる。

存在価値の序列における人間の位置の低さなど正に自然に寄生するしか能のない存在の自己認識(自己存在に対する自己評価観)の反映と云える。いわゆる現代人の肥大した「万能感」,「全能感」に依拠して自己を地球上で最高の存在と位置づける自己意識とは正に正反対の意識(精神構造)である。

### 5.3 精神構造生成のメカニズム

新行動主義に基づく現代の心理学においては、「生活体」(Organism:人間及び動物)の「行動」(Behavior),あるいは、「反応」(Response)を、 $S(E) \rightarrow O \rightarrow R(B)$ の図式で捉える。すなわち、 $S$ (Stimulus:刺激)( $E$ (Environment:環境))が $O$ (Organism)に作用したときに、両者の相互作用の結果、 $O$ の $R$ (Response(B(Behavior)))が誘発(生成)される。このとき、特定の $S$ に対しての特定の $R$ の生起は、この $S$ と $R$ との間に結合( $S-R$ 結合)を生ぜしめる。つまり、この特定の $S$ に $O$ が2度目に遭遇したとき、特定の $R$ を $O$ が生ぜしめるという可能性を形成する。換言すれば、ある特定の $S$ に対してある特定の $R$ が条件づけられる。以後 $S-R$ という系列の生起(経験)回数の増大に伴って $S-R$ 結合強度( $S$ に対して $R$ を生成するという可能性)は増大する。そして、ある特定 $S$ に対して、ある特定 $R$ が確実(ある一定の基準(確率)以上)に生起するようになったとき、 $S-R$ 結合( $sHr$ と表現する。 $H$ はHabit(習慣)の略)が形成(学習,条件づけ)されたと考えている。このとき、 $O$ は $sHr$ という「習慣」を獲得(学習,形成)したと考え、この $sHr$ は $O$ の内部機構として組み込まれたと考えるのである。

この考え方で自然環境(の在り方)による人間の精神

構造の形成を考えることができる。すなわち、S(E)-O-R(B) の図式において、S(E)が人間の生活環境である「自然環境」であると考えればよい。この自然環境（例えば、生物の存在を一切拒否するような灼熱の太陽に照りつけられた砂漠地帯、「飢え」と「寒さ」しかもたらさない厳寒の「不毛」の西欧（ローマ帝国人の西欧観）の中で生を営む人間（民族）が、自然環境に対しての反応（R）としての「意識（心理）」（例えば、「嫌悪感」、「畏怖感」、「恐怖感」、「憎悪感」、「断絶感」、「絶望感」など）を生ぜしめつつ長年にわたって生存すれば、この「意識（心理）」は、「形成（獲得、学習、条件づけ）」された「意識（心理）」として人間（民族）の精神構造の中に刻印されると考えられる。

人間（民族）の生を規定する上で決定的な役割を果たす自然環境に対する「意識（心理）」は、彼の精神構造の中核、あるいは、根源的・根底的・基底的な部分となる。それ故に、その「意識（心理）」は、彼と他のもの（例えば、「他者」）との関係（「他者」の場合には、「人間関係」）においても彼の心理の根底に存在するが故に、人間関係を規定する心理となる。

## 6 今後の課題

以上のことから、「民族的精神構造」が、各々の民族が生活環境とする自然環境によって歴史的に形成されるものであることを論理的に明らかにしたと云える。

したがって、次の課題は、日本人の「民族的精神構造」である「一体感」の心理と西欧人のそれである「断絶感」の心理とを各民族が置かれた自然環境との歴史的関わりの中で検討することである。つまり、日本列島、西欧の自然環境がそこで生活を営んできた日本人、西欧人にとって如何なる生活環境を歴史的に提供してきたかを検討することである。

## 文 献

- 1) 塹江清志ら：「「一体感」と「断絶感」 名古屋工業大学紀要, pp.185~190, Vol.50, (1998)
- 2) 木村 敏：「人と人との間」, 弘文堂, (1972)
- 3) 河合隼雄：「ユング心理学入門」, 培風館, (1967)
- 4) 土居健郎：「甘えの構造」, 弘文堂, (1971)
- 5) 湯浅泰雄：「神々の誕生」, 以文社, (1972)